

教採講座の取り組み

全学教職センター客員教授 東小川 昌夫

「できるようにする」ための工夫

過日、小・中学校の授業をそれぞれに1日参観する機会を得た。

小・中学校の担任や各教科担当は、いかに児童生徒の興味・関心を高め、主体的に意欲を持ち続けながら学ばせるかということに腐心していると感じた。学習課題の提示にしても、児童生徒からの発想やひらめき・疑問をもとにうまく構成されている場面に出会った。教師の力量が試される場面で、しっかりとした取り組みができているなど感心した。

私だけが教育の情報・現代化から取り残されているかもしれないが、小学生の体育の授業でマット運動を参観して驚いた。授業では、児童がマットで後転した姿を固定したビデオカメラで撮影し、後転し終わった10秒後（設定により変動）に大画面で繰り返し見られるという。児童は、自分の後転している姿が思った通りにできているかどうかや、どこをどのように直していけばよいかを把握しやすくなり、「後転ができた・好き」につながるという担任の説明であった。

これまでのこの種の手立てを振り返ると、自分の後転している姿をより明確に把握させるための苦労を重ねてきたように思う。後転後、「後続の児童の様子を観察し、観点を決めて口頭でアドバイスする」という古い昔の話から、いかに客観的に振り返えられるかに苦心してきた。しかし、ビデオカメラが学校に登場し、小型・軽量・廉価化してからは状況が一変した。映像媒体を教材として使用することにより、より一層の教師の手立ての進展が可能となってきたはずである。教育の根幹は変わらずとも、児童生徒に接する手立ての種類と方法の豊富さは、昔の教師としてはうらやましい限りである。

さて、教採講座では、より授業実践に近い形での学習の機会を体験すれば、学生の手立ての数と種類が増えるのではないかと考え工夫を試みている。

個人や集団面接、さらには集団討論への対策として、「自分の意見を素早くまとめ、わかりやすく簡潔に伝える」活動である。具体的には、新聞記事に掲載された投書を読み、短時間で自分の意見をまとめ、隣に座る学生にわかりやすく文章で伝えるという活動を設けている。それは、集団討論の際に、他の受験生の主張した意見を受けて、素早く自分の考えをまとめるという場面を想定している。さらにおまけとして、互いの意見文を読み合い、コメントに残すということを付け加えている。本来なら、小グループでの話し合いの場を設け、各自の意見を練り直し、発表し合う時間も欲しいところだが、時間的な制約が大きい。自己の意見をしっかりまとめて記述する、さらに、書かれた意見に対して、心に残るコメントを素早く書くという実践でとどまっているところである。

「できるようにする」ために、まず「できるようになる」という実践をこれからも継続していきたい。